企業参謀

小堺昭三

正業参謀 小堺昭三
集英社
937

企業参謀

一九七七年一一月二五日　初版発行
一九七八年　四　月二八日　四版発行

定　価　九八〇円

著　者　小堺昭三

装幀者　三嶋典東

発行者　堀内末男

発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ッ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部（〇三）二三〇―六三六一
販売部（〇三）二三〇―六一七一

印刷所　中央精版印刷株式会社

検印廃止
乱丁・落丁本はお取替えいたします

© 1977 S. KOSAKAI Printed in Japan

0093-775005-3041

企業参謀

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

一

〈……今日は死ねる、りっぱに散れる〉

高野卓也はくりかえし自分に呟いていた。

日の丸の鉢巻をきりりとしめた野性味のある貌には、受難に歓喜する若き殉教者のような陶酔感さえあふれていた。悲壮感もまた、若者にとっては栄光への快感であり、くちびるのはしには会心の微笑がただよっていた。

——昭和二十年五月×日。

一式陸上攻撃機は両翼のエンジンをふるわせ、あえぎながら高度をあげていた。九州の南端、大隅半島にある海軍特攻基地鹿屋を午前五時三十分に飛びたち、まだ五分と経過していなかった。鹿児島湾が紺碧の水彩絵具を濃くとかしたように美しく、灰黒色の噴煙をあげる雄々しい桜島が後方になった。折からのぼる朝日をあびる薩摩富士の開聞岳が、右手前方にこがね色にかがやいており、水平線は橙色にかすんでいた。

すがすがしい南国の朝である。

この光景を鑑賞できるのも最後であり、開聞岳の山頂を見つめ、なおも呟いた。

〈りっぱに死ねる、みごとに散れる、それでいいんだ、卓也〉

左には僚機が見えていた。

僚機もあえぎながら機首をあげていた。

一トンもの爆薬をつめた魚雷状のものを、胴体の下に抱いている重みで、そうならざるを得ないの

だ。その魚雷のようなものが、人間ひとりが操縦しながら敵艦へ突入してゆく小型ロケット機「桜花」であった。

この操縦士を神雷桜花特別攻撃隊と称していて、母機はわが子「桜花」の戦果を見とどけて帰還する。攻撃に失敗したとしても「桜花」自身には生還するための燃料は積載されてはおらず、母機から放たれたが最後、どのみち死しかなかった。いわば、パイロットにとっては「桜花」は、生きたままはいる棺桶にひとしい。

すでに連合艦隊をも葬られてしまった日本海軍が苦しまぎれに考案した、幼稚にして残酷きわまる特殊兵器だ。高野卓也が搭乗している一式陸攻機もむろん、わが子「桜花」を抱いており、彼が神雷特攻要員である。

卓也は海軍中尉、二十四歳であった。

東京のG大新聞科を卒業していた。学徒出陣で多くの大学生らとともに海軍予備学生となり、戦闘機乗りとして訓練をうけ、零式戦闘機を操縦してアメリカの新鋭グラマン戦闘機やロッキードP38などとわたり合ったが、いまは零戦もほとんどやられ、ついには特攻要員にまわされたのであった。

今日の攻撃目標は、沖縄の南東洋上にあらわれた敵機動部隊である。沖縄本島には十八万人もの米海兵隊が敵前上陸していて、太平洋戦争最後の決戦場となっていた。これまで二千機もの神風特攻機が突入、米海兵隊の上陸を阻止しようとしたが果さず、二週間前には超弩級戦艦「大和」も敵艦船群に殴りこみをかけたが、多勢に無勢であえなく海底の藻屑と化してしまっていた。

今日は十一機の母機で、十一人の神雷特攻隊員が水盃をかわして出撃した。編隊を組めばグラマン戦闘機の好餌となるばかりなので、各機単機発進で鹿屋基地を飛びたち、それぞれに単独コースで目標の機動部隊をとらえる奇襲作戦であったが、護衛してくれる零戦は一機もなかった。

卓也の母機は五機目に発進した。

こがね色にかがやく開聞岳を見おさめてからの彼は、かるく瞼をとじた。母機はエンジン全開でな

おも上昇中だ。瞼をとじている彼にはその爆音が、眠気をさそう昆虫の翅音のように遠くに聴えた。

いつしか故郷の『太地音頭』を唄いはじめていた。野太い声で、調子っぱずれであった。

卓也の故郷は紀伊半島の突端で、彼は熊野灘の荒海を見ながら育った。

その太地町はむかしから捕鯨の基地として有名であり、

へハアーくじら汐吹く太地の岬
　アリャ、アリャ、アリャサ
浜に浜木綿のドン、ドン、ドントナ
浜に浜木綿の花が咲く
　ドン、ドン、ドントナ

卓也は故郷のこの素朴な民謡が大好きだった。戦友らと酒盛するさいにも、これ一つしか知らぬかのように豪放に、照れもせず唄いつづけた。流行歌など性に合わない。

中学生のころの卓也は赤褌ひとつで鯨銛をにぎり、小舟を漕いで捕鯨に出かけたこともある。G大に進学してからは喧嘩ばかりしていた硬派で、海軍予備学生になってからも負けず嫌いだった。

ファイトのない部下には容赦なく鉄拳をふるい、豪傑ぶりには先輩や上官さえも一目おいていた。爆撃理論とか射撃物理といったような数学的なものは苦手だったが、実戦ではグラマン戦闘機を撃墜したし、爆撃技術も正確であった。理論で戦うのではなく、死中に活をみいだす捨身の戦法を得意としたのだ。

だが、いま『太地音頭』を口ずさみながら想い出しているのは、そうした過去の勲功や喧嘩大将だったころの自分ではない。とじている瞼の内がわにちらつくのは、橙色にうれた紀州の蜜柑山であったり、男性的な熊野灘の潮騒であったりした。雄大な蒼い荒海は自分が散華してもなおそこに存在し、ドドドン、ドドドドン……と岩を打つ波音は太古より未来永劫につづいてゆくのだ、と思った。当り前のことながら、その当然のことがいまは大切なものに思えるのだった。

母親が塩焼にしてくれた秋刀魚の味もなつかしく、生つばが出てきそうだった。熊野灘の秋刀魚の味は日本一うまかった。船宿を経営している一徹者の父親、蜜柑の木かげから顔をのぞかせている妹たちの笑顔もちらつく。

思いうかべたいにも浮かんでこないものが一つだけあった。いまだに愛をささやき合った恋人はいなかったし、女体の経験もない。愛のすばらしさも女体の神秘も知らずに、この世におさらばするのであった。

女体を知るチャンスはいくらもあった。

基地の外には芸者もいれば娼婦もいて、戦友たちは当然のように遊びにいった。

「おーい、上陸するぞォ」

非番の日、みんなは浮々して外出した。上陸するというのは芸者を買いにゆくことであるが、この日になると卓也だけはいくじがなかった。先輩でさえ一目おくほどの豪傑なのに、妙に純情な男になってしまい、金銭で女体を自由にしたがる自分を「さもしいぞ」と叱りつけたくなるのだった。

暇さえあれば戦友たちは愛の手紙を書いていた。恋人への遺書をしたためながら、目頭を熱くするものもいた。彼女のほうからもよくラブレターが届き、戦友たちは涙をためて何十ぺんも読みかえすばかりでなく、便箋から匂う彼女の香りを嗅ぎまわった。髪の毛が挟まれていようものなら狂喜した。

卓也の場合は、女文字の手紙といえば、母親か妹のにきまっていた。恋文まがいのものでもいいから送ってほしくて、小学生時分の近所の漁師の娘を思いだし、手紙を書いてみようかと思ったことがある。だが、すでに彼女は他人の嫁になっているような気がして、便箋をひろげたもののペンが走らなかった。

「……高野」

機長の杉尾雅彦中尉の声がした。

卓也は我にかえりへとにかく、おれになかったものは借金と女性関係だ。どちらもないほうがさっ

ばりしていいや〉負けず嫌いの彼らしく呟き、操縦席のほうを見た。
「いい気持で唄ってたな」
「惚れぼれする声だっただろう」
「神雷晴れになりそうだぞ」
「当然さ、おれが出撃するんだから」
トンガリ帽子のかたちをした屋久島の上空だった。高度二千五百だが、まだ上昇をつづけている。快晴である。無風である。神雷晴れというのは視界良好で「桜花」が目標をとらえやすい天候、という意味だ。
神雷晴れだからみごとに敵に命中する、おまえの『太地音頭』もこれで聴けなくなってしまうが、おれもすぐあとから追いかけるからな、靖国の森で再会しよう……と杉尾中尉は両眼で語りかけていた。
杉尾はK大を卒業しており、やはり学徒出陣で卓也とは同期の桜であった。平和時であれば経済学部だったから、エリート商社マンになっているはずだ。
通信士が忙しく鹿屋基地との連絡を保ち、射手は上空や下界に目をくばっていた。敵戦闘機がふいに、禿鷹のごとく襲ってくるのに備えてであり、僚機の姿は見えなくなっていた。単独コースをえらんで敵機動部隊に迫まるためである。
高野卓也は零戦に乗っていたころ、いちど死にそこねたことがあった。
零戦二十機とグラマン三十機が、彼我いりみだれての空中戦になった。卓也は二機を屠った。うち一機は銃弾がパイロットに命中しキリもみ状態になって墜落していったが、その直後に卓也の愛機が追尾される番になった。横転、急旋回、急降下、あらゆる手をつくしてふりきろうとしたが、敵は執拗にぴったりくっついてきて乱射する。
急上昇しているときについにエンジンをぶち抜かれ、愛機は火と黒煙に包まれた。旋回しながら風

防をあけ、空中爆破のおそれがあるので、一瞬を争って脱出した。三千メートルの高度から両手をひろげた卓也が、垂直に落ちていった。

落下傘がなかなか開かなかった。

「かあさーん……！」

叫びたいのをこらえた。悠久の大義に生きる特攻隊員でも、突入のさいには天皇陛下万歳は唱えなかった。両親の顔が思いうかび、たいていは母親の名を絶叫した。虫の息でジャングルのなかに横たわっている重傷兵たちも、そうであった。だが、おかあさーんと叫んだものは必ず死んだ。母から生まれ、母の胎内に還えるのであった。

垂直に落下しながらも卓也は叫ばない。死にたくないからだが、命が惜しいのではなかった。生きていてもういちどグラマンに挑戦したい。パラシュートが開かないながらもなお、その闘志があるのだった。

それからの数分間か、十数分間かのことはおぼえていない。気を失ったのだ。

気がついたときには洋上をただよっていた。白い落下傘が波間に浮いていたところをみると、途中で開いてくれたのだ。それから三時間、泳ぎつづけた。それが屋久島の沖合であった。

「……高野、二十分前だ」

杉尾中尉が改まった声で告げた。

答えるかわりに卓也は、右前方下を視た。

「沖縄本島が見えないな」

「神雷晴れがおかしくなってきたんだ。急速に雨雲がひろがっている」

灰色の密雲にすっぽりおおわれていた。それがなければ、地獄の決戦場と化している砲煙や、火の手や敵艦船群が見えるはずであった。

二十分前になれば桜花に移乗しなければならないので卓也は〈今日は思いきり、かあさんと叫ぼ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

う〉と自分に言いながら仕度にかかった。
杉尾の肩ごしに高度計を見ると、針が五千メートルを指していた。
「高野、成功を祈る」
革手袋をはずし杉尾が右手をさしのべた。
それ以上は言葉にならない表情である。
卓也もがっちり握りかえし、きみのような友人に恵まれて幸せだった、靖国の森で待ってるぞ、という意味の微笑を浮かべた。
「武運を祈ります」
偵察員の兵曹が、赤い葡萄酒のグラスを眼の高さにさしだした。訣れの盃である。
「ありがとう。戦果をしかと見届けてくれ」
卓也はひとくち飲み、機長の杉尾雅彦にまわし、杉尾もひとくち口をつけると通信士に渡した。通信士、射手が挙手の敬礼をしてからふるえる口へもっていった。かれらの眼には量はすくないが、熱い男の涙がキラキラ光っていた。
機体がグラグラッとゆれた。
密雲にとざされていても敵艦船が、レーダーでとらえて対空射撃をしてくるため、炸裂の衝撃をうけるのだ。ということは、敵目標が近くなっている証拠でもある。
射手はすぐに持場にもどり、敵艦載機の接近に備えた。
母機の速力はわが子「桜花」が重いため、依然としてのろい。時速は百八十ノットだ。
機上整備員が足もとのハッチを開けた。
日の丸の鉢巻をしめ直して卓也が言った。
「視界がわるいな。敵上空を旋回して、できるだけ下方透視が可能なところを見つけてくれ。敵艦発見と同時に投下をたのむ」

口をへの字にして杉尾がうなずいた。
卓也は胸を張って深呼吸した。
いよいよ生きたまま棺桶にはいるのだ。
「高野中尉殿……！」
ご無事で、と言いたいところだが、確実に死しかないのだからそれは言えず、ひげ面の整備員の田代が涙声をかみこらえた。嗚咽にふるえるそのひげをひっぱって卓也は、半ば本気で怒っていた。
「泣くやつがあるか、男の壮途だぞ」
自分のために訣れを惜しんでくれている、とはわかっていても、こういう女々しい男が嫌いなのである。
ハシゴを伝って卓也は棺桶の操縦席に移乗した。大男だったので窮屈で手間どった。やっと座り心地を安定させ、操縦装置を点検した。一トンの爆薬の爆発装置の発火栓をはずし、ハッチから顔を出している頭上の田代に手渡した。
それを受けとって田代はハッチをかたくとざした。
その一瞬、生への穴道が完全に遮断されたのだ。高野卓也はこの瞬間から、もはや人間ではなく、一個のロケット弾の部品でしかなくなったのであった。
「整備ヨーソロ」
杉尾機長に無線で伝えて卓也は、かるく操縦桿に右手をそえ、フロントガラスを見つめて待った。スイッチをおして爆弾を投下するのと同じく、機長が「桜花」を切りはなすのである。五千メートルの上空から切りはなされた「桜花」が、目標物に到達するまでは約一分である。
だが、視界はゼロ。目標物に命中させるのは困難だ。しかも、密雲はいっそう厚みを増していた。
投下合図のブザーが鳴るのを、いまかいまかと緊張して待ちつづける卓也は、ポツ……ポツ……と水滴が当ってフロントガラスが斑になるのを見た。

「……雨だ」
神雷晴れどころか最悪の天候だ。
「畜生ッ、なんでこんなときに降りやがるんだ！」
母機は高度をさげながら旋回し、雲のきれめをさがしもとめた。手動操縦して体当りしてゆかねばならぬ原始的な新兵器だから、視界のきかない空中から投下しても命中するはずがない。
フロントガラスごしにはっきりと、雨脚が見えるまでに降ってきた。
雲のきれめをさがしだすには母機は、なおさら高度を落してゆかねばならない。五千から四千、四千から三千五百と降下したが、それでもまだ雨雲がたれこめていた。
ついに母機は千メートルまで降下した。
まだ海面すら見えなかった。
雷鳴がとどろき赤い稲妻が走った。おそらく洋上も、地獄の戦場の沖縄本島もいまは、篠つく豪雨になっている。南国特有の沛然たるスコールである。
そのとき、機長命令が耳にひびいた。
「視界不良のため敵艦を捕捉し得ず、投下中止。高野、本機へもどれ」
「そんなバカな、おめおめ生きて還れるか。それでも親友かッ！」
「どうするというのだ？」
「高度をあげろ、五千までもどせ」
「無駄だ」
「では、この位置から投下しろ！」
「効果はないッ」
「頼む、杉尾ッ、名誉のためだ征かせてくれッ。投下スイッチを押してくれッ」
棺桶のなかの卓也は歯ぎしりした。

「落ちつけ、高野、落ちつくんだ」
「何も言うな、はやく押せッ！」
高度五千以下からの投下は無効果であり、禁じられていた。
また視界不良の場合は特攻隊員を母機にもどし、桜花だけを投棄して帰還すべし、となっていた。
それを知らぬ卓也ではないが、
「押せ、おせッたら押さんかッ！」
なおも吠え、狂ったように泣きだした。有機ガラスでできているフロントを拳で、ガンガン殴った。
頑是ない子供みたいであったが、散華できない恥辱を嘗めたくない一心だった。
有機ガラスにひびがはいった。
が、彼の右手の骨も砕けるばかりになり、皮膚がやぶれて血がにじんでいた。
杉尾も眼玉をむいてわめいた。
「きさまはそんなに犬死したいのか。敵艦を轟沈させずに死んで何になる。出直してこそ真の勇者ではないかッ！」
頭上のハッチが開けられていた。
「はやく、あがってきてください中尉殿」
田代が右手をさしのべていた。
無念がる卓也が母機にもどったと同時だった。
「三時の方角より敵機来襲ッ！」
叫びながら射手がバリバリ撃ちはじめた。
密雲を突きぬけてくる数機の、熊ん蜂のようなグラマンが見えた。すごいスピードだ。
杉尾が投下スイッチを押した。
無人の「桜花」は放たれた。

身軽になったとたんに浮力がついて、母機はぐーんと上昇した。
それとは対照的に、無人の棺桶はあっというまに、灰色の雲海に吸いこまれていった。
卓也は機長席のうしろにしゃがみこみ、両ひざのあいだに鉢巻をしめた頭を、深くたれていた。泣いていた。両肩がふるえていた。敵機の群れに撃墜されるかもしれないのに、それさえも忘れているかのようであった。
杉尾は何も言わなかった。この危機から脱出するために彼は彼で、必死の形相で操縦しているのだった。

二

四畳半の小座敷の、窓の簾障子はぴったりとざされていた。

その簾ごしに廂に吊してある風鈴が見えているが、そよりの風もないので涼しい音色を聞かせてはくれない。廂をおおうばかりに繁っている桑の木もうごかない。じっとりと暑い。

夏の盛りの午さがり。

さして大きくもない料亭の二階であった。

高野卓也は女からはなれると、粗い息づかいの裸をシーツの上に横たえ、向うむきになって簾ごしのその、じっとうごかない風鈴と桑の枝を見つめた。対照的に卓也の鼓動は音をたてて躍動していた。陽やけした太い首すじ、広くがっちりした背中、女の肌と密着していた下腹や胸板にも玉のような汗が噴きだしていた。

暑さのせいばかりではない。はじめて女体を経験して、全身の血が滾りに滾っているからである。〈女を抱くというのはこういうことだったのか。これでよかったのか。ほかの男たちに負けないように、おれはやれたのだろうか〉

手脚をバタバタさせずにはいられないような歓喜があった。同じくらいに、おれはほかの男より魅力がなかったのでは……という不安もあった。

そのことを女に確かめてみたいのだが、はずかしくて向うむきになったのだ。奔馬みたいな息づかいになったり、たちまち絶頂感に追いあげられて淫らな声を発したおれを、彼女はひそかに軽蔑したのかもしれない。そんな自己嫌悪もあって、訊いてみる勇気がないのでもある。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.